パライオロゴス王朝皇帝家の姻戚関係

杉　村　貞　臣

序　　言

ビザンティン帝国史（610–1453）においてパライオロゴス王朝（1261–1453）時代の領域は，14世紀中頃にはバルカン半島東部に偏したが，15世紀初期にはコンスタンティノポリスとその西部郊外に局限されてしまった。もはや帝国というよりは，ひとつの都市国家に過ぎなくなってしまった。そのため7～11世紀のバルカンと小アジアを基本的領土としたビザンティン帝国とはおよそ形態を異にしているため，パライオロゴス王朝時代を帝国史の叙述から除外している研究者もいる(1)。しかしそれでもなおコンスタンティノポリスにはアウグストゥス帝以来の「皇帝位」が存続しており，ミカエル8世（1261–1282）よりコンスタンティノス12世（1449–1453）に至るまで193年間に，外戚者を含めて11人の皇帝が統治した。そして一部ではこの時代の帝国を「ギリシア民族の起源」をみなす研究者もいる(2)。

パライオロゴス王朝については，従来対外問題に関する研究が，軍事，交易などの面から数多く見られた。しかしビザンティン帝国史の研究・叙述を通じて特徴的なことは，各皇帝を中心にした「皇帝家の家系図」が極めて詳細に書かれていることである。この家系図は，すでにヴァシリエフやオストロゴルスキーなどにより書かれたが(3)，とくに『ケンブリッジ中世史』IV–1．オックスフォード版『ビザンティウム事典』において詳しい(4)。

本稿ではこれらの家系図からひとつの「歴史的世界」を読みとりたい。具体的には皇帝家の配偶者について，彼らの出身地や社会的身分・地位に注目する

と，そこからパライオロゴス王朝皇帝家の姻戚関係が指摘できる。またその姻戚関係を通じて皇帝家を支えた地域が明らかになり，またある意味ではパライオロゴス王朝時代の帝国領域とは別に，「ビザンティン世界」といった歴史像を樹立することも可能である。

注

(1) Zakythinos, D. A., Byzantinische Geschichte 324–1071, (Wien-Köln-Graz, 1979). 井上浩一『ビザンツ帝国』(岩波書店，1982).

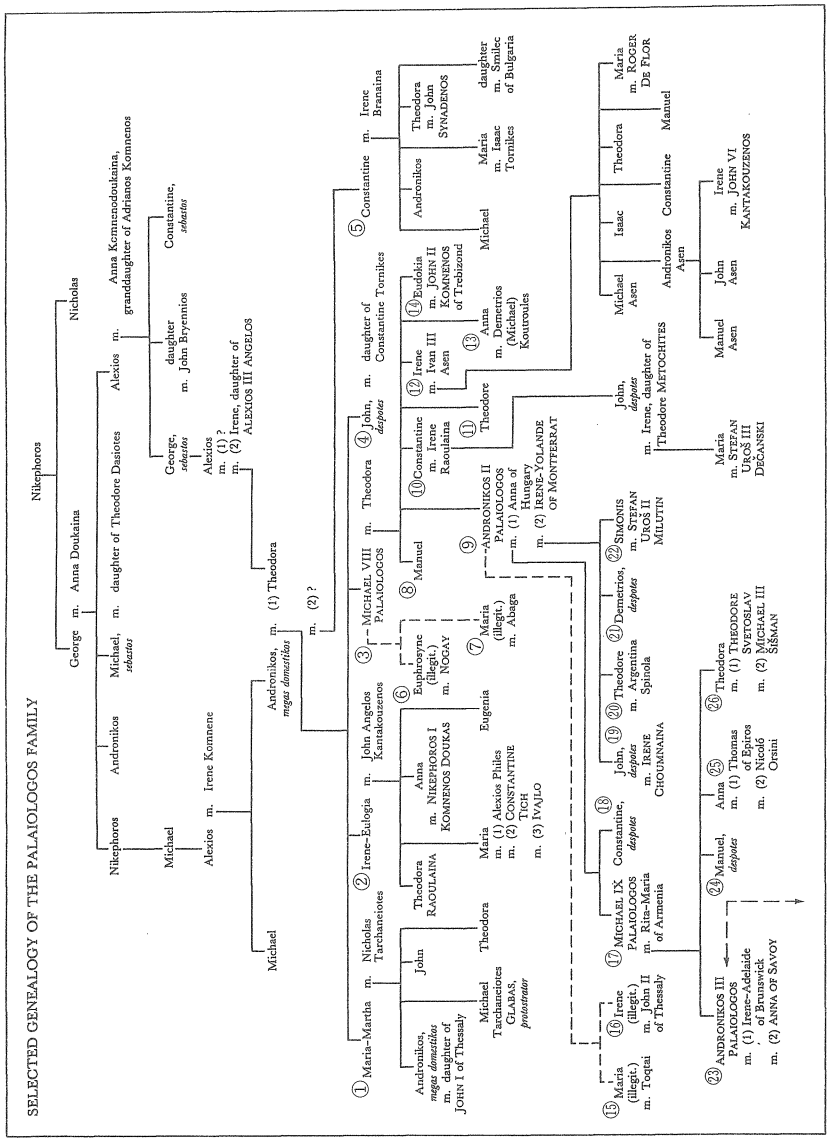
(2) Vacalopoulos, A. E., Origin of the Greek Nation, The Byzantine Period, 1204–1461, (New Jersey, 1970).

(3) Vasiliev, A. A., History of the Byzantine Empire, 324–1453, (Madison, 1952), 731. Ostrogorsky, G., History of the Byzantine State, (New Jersey, 1969), 579.

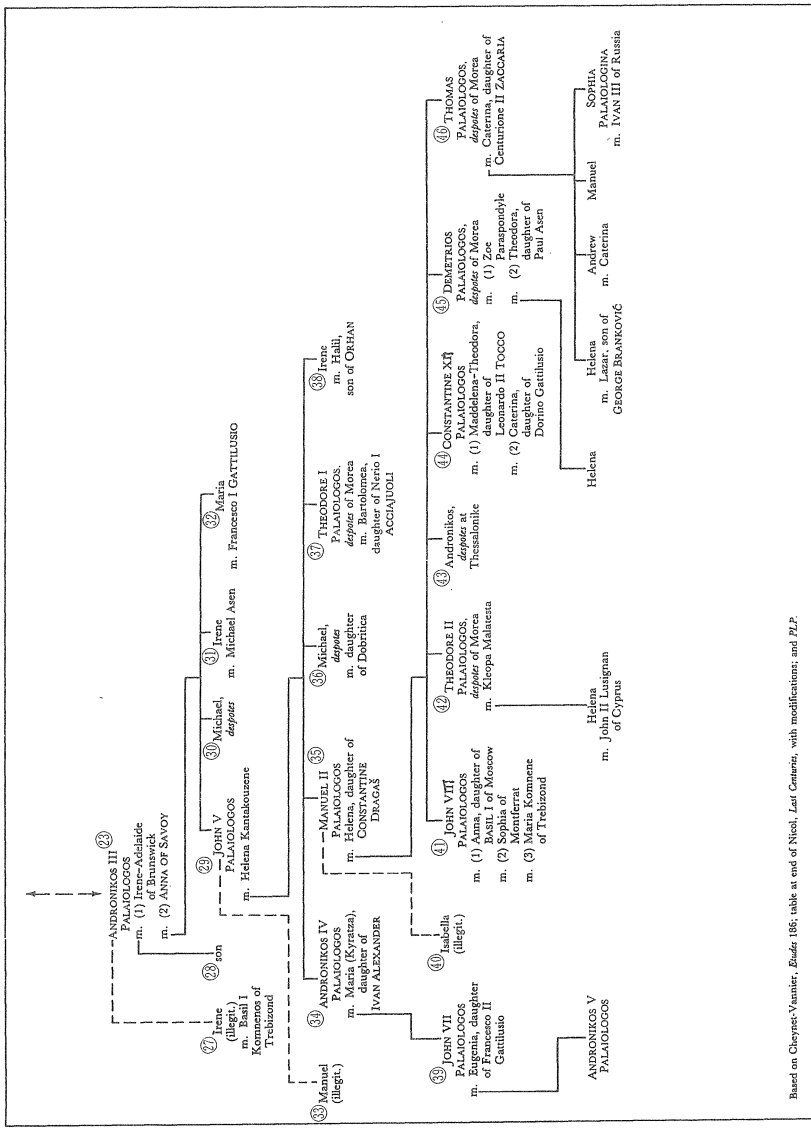
(4) The Cambridge Medieval History, IV–1 (London, 1966), 797. (=CMH). The Oxford Dictionary of Byzantium, (New York, 1991), 1558–1559. (=ODB).

1. パライオロゴス家

「パライオロゴス」とは，その本来の意味は「くず物・古い金物・がらくた」であり，またそれを扱う「くず物屋」である。しかしビザンティン帝国史では，パライオロゴスは高貴な家の名として扱われる。その「パライオロゴス家」は古代に祖先をもつといわれるが，定かではない。帝国史上にパライオロゴス家の人物が最初に名を表すのは，ミカエル7世時代（1071–1078）であり，ニケフォロス（家系図最上段）がメソポタミア地方の将軍・統治者であった。その息子ゲオルギオスはアレクシオス1世時代（1081–1118）の優秀な軍司令官であった。またパライオロゴス家の男子は，皇帝をも輩出したことのあるドゥカス家やコムネノス家といった，当時の帝国における有力な家柄の女子と結婚していた。このようにしてパライオロゴス家は，11世紀後半から12世紀初期にかけて，帝国各地において，みずからもようやく有力な地位を占め



The Oxford Dictionary of Byzantium 1558 ページより引用



同 1559 ページより引用

るようになってきた。

そして13世紀前半に現れたアンドロニコス[1]は，軍隊の最高司令官(megas domestikos）に就任していた。この職は本来コンスタンティノポリス駐在の首都防衛軍の最高司令官を意味していたのであるが，この時帝国はラスカリス王朝（1204–1261）のもとでニカイアに首府を置いており，その職務の実態は明らかではない。また彼は生涯2度結婚しており，最初の妻テオドラはアレクシオス3世（1195–1203）の娘イレネの娘であった。この時点でパライオロゴス家はビザンティン帝国史において，かつての皇帝家と家系上の連続性をもったといえる。

ビザンティン帝国史におけるパライオロゴス王朝は，このアンドロニコスの息子ミカエルの時代から始まる。

注

(1) ODB 1557.

2. アンドロニコスの家族の結婚相手

アンドロニコスは，最初の妻テオドラとの間に男子2人女子2人，2度目の妻（名前不詳）との間に男子1人，計5人の子を得た。いまODB記載の家系図（以下同じ）により，その結婚相手を見ると次のとおりである。なお家系図に示した①②③……などの番号は，筆者がつけたものである。

① マリア・マルサの結婚相手ニコラスは，タルカネイオテス家の所属である。タルカネイオテス家はスミュルナ地方に所領をもっており，ニコラスはヨハネス3世時代（1222–1254）に軍隊最高司令官（megas domestikos）を務めていた。(ODB 2011–2012)

② イレネ・エウロギアの結婚相手ヨハネスーアンゲロスはカンタクゼノス家の所属である。カンタクゼノス家はクゼナスという地名（スミュルナの近く）に由来するが，ヨハネスの職位・地位については必ずしも明らかでな

い。(ODB 1103–1104)

③　ミカエル8世（1261–1282）の結婚相手テオドラは，ヴァタツェス家に所属し，先のヨハネス3世の兄弟の孫娘にあたる。ヴァタツェス家は1000年ごろよりマケドニア地方に所領をもっていた。(ODB 2154)．なおかれには愛人が1人いたが，その名不明である。

④　ヨハネスの結婚相手は，トルニキオス家のコンスタンティノスの娘（名前不詳）である。トルニキオス家はゲオルギア地方の出身といわれる。(ODB 2096)

⑤　コンスタンティノスの結婚相手イレネは，ブラナス家の所属である。ブラナス家はスラヴ系の家柄といわれ，11世紀以来帝国史にその名が表れ，13世紀にはスミュルナ地方に所領をもっていた。(ODM. 319–320)

以上のようにアンドロニコスの子供たちの結婚相手6人は，いずれもラスカリス王朝時代の帝国領土の基盤であったスミュルナを中心に小アジア西部と，11世紀までのビザンティン帝国領域内部のゲオルギアやマケドニアであったといえよう。

3．ミカエル8世（1261–1282）の家族の結婚相手

ミカエル8世は正妻テオドラとの間に男子4人女子3人，愛人の子2人計9人の子を得た。

⑥　エウフロシュネの結婚相手ノガス（ノゲイ）は，モンゴルの王子・軍司令官であった。(ODM. 1490)

⑦　マリアの結婚相手アバガは，イル汗国第2代目の汗であった。(CMH IV–1, 163)

⑧　マヌエルは家系図上ミカエル8世の長男と見られるが，結婚についての詳細はわからない。

⑨　アンドロニコス2世は正妻2人愛人1人をもった。最初の妻アンナはハンガリー王ステファノス5世の娘（CMH IV–1, 589)，2度目の妻イレネー

ヨランデはモンフェラト公ウイリアム7世の娘である。(ODB 1010). なお愛人の名前などは不明である。

⑩ コンスタンティノスの結婚相手イレネは，ラオウル家の所属である。ラオウル家はノルマン系の貴族ともいわれ，12世紀以来トラキア地方に所領をもち，一族にはアンゲロス王朝やラスカリス王朝の時代に高官を輩出し，ミカエル8世の支持者も現れた。(ODB 1771)

⑪ テオドロスは家系図上ミカエル8世の4男と見られるが，結婚状況は不明である。

⑫ イレネの結婚相手イヴァン3世は，アセン家に所属する第2ブルガリア王国国王である。(Ostrogorsky, G., History of the Byzantine State, New Brunswik, 1969, p. 462.)

⑬ アンナの結婚相手デメトリオス（ミカエル）は，エピロス公国の有力者と考えられる。(CMH IV-1, 797)

⑭ エウドキアの結婚相手ヨハネスは，トレビゾンド帝国皇帝である。(ODB 1047)

以上ミカエル8世の子供9人の結婚相手9人についてみると，愛人の子2人はモンゴル系，正妻の子のうち2人はハンガリー，イタリア，ブルガリアのいわゆる外国人であり，2人は13世紀以来ビザンティン帝国より分かれたエピロス公国，同じくトレビゾント帝国の者であった。ただコンスタンティノスのみが当時の帝国領土のマケドニア出身者と結婚したのである。

4. アンドロニコス2世（1282–1328）の家族の結婚相手

アンドロニコス2世は正妻（2人）より6人，愛人より2人，計8人の子を得た。

⑮ マリアの結婚相手トクタイについては，詳細不明である。(CMH IV-1, 797)

⑯ イレネの結婚相手ヨハネスは，アンゲロス家の所属である。このアンゲロ

ス家はビザンティン帝国アンゲロス王朝（1185–1204）の一派であり，1204年コンスタンティノポリス陥落後テッサリアでエピロスの統治者になった。（CMH IV–1, 348, 798）

⑰　ミカエル9世の結婚相手リタは，アルメニア王ヘトゥム2世の姉妹であり，結婚後その名をギリシア風のマリアに変えた。（ODB 1367）

⑱　コンスタンティノスについては，デスポテス（despotes）の称号をもつ以外，結婚状況は不明である。

⑲　ヨハネスの結婚相手イレネは，クマン人のニケフォロスの娘であるが，詳細は不明である。

⑳　テオドロスの結婚相手アルゲンティナは，スピノラの娘であるが，詳細は不明である。なおテオドロスはモンフェラトの公になっていた。（CMH IV–1, 797）

㉑　デメトリオスについては，デスポテスの称号をもつ以外，結婚状況は不明である。（CMH IV–1, 797）

㉒　シモニスの結婚相手ステファノス・ウロシュ2世・メロティノス（1282–1321）は，セルビア王であった。（ODB 1949–1950）

以上アンドロニコス2世の子供8人の結婚相手6人をみると，外国人がアルメニア人，クマン人，セルビア人の3人，エピロス公国の統治者1人，結婚相手の詳細不明2人である。

5. ミカエル9世（1294–1320）の家族の結婚相手

ミカエル9世は，正妻リタ＝マリアとの間に男子2人女子2人，計4人の子を得た。

㉓　アンドロニコス3世は2度結婚した。最初の妻イレネは下サクソニアのブルンスヴィックの出身者であり，2度目の妻アンナはサヴォイ公国の出身であった。（CMH V–1, 357, 360–361）．なお他に愛人1人がいたが，詳細は不明である。

㉔ マヌエルについては，デスポテスの称号をもつ以外結婚状況は明らかでない。

㉕ アンナは2度結婚したが，最初の夫トマスはエピロスの統治者（despotes 在位 1290–1318）であり，2度目の夫ニコラス・オルシニはケファレニア出身のエピロスの統治者（在位 1318–1323）であった。(CMH IV–1, 349)

㉖ テオドラは2度結婚したが，最初の夫テオドロス・スヴェトスラヴは第2ブルガリア王国テルテル王朝の王（在位 1300–1322）であり，2度目の夫ミカエルは同王国シシュマン王朝の王（在位 1323–1330）であった。(CMH IV–1, 1153)

以上ミカエル9世の子供4人の結婚相手7人をみると，外国人はドイツ人，イタリア（フランス？）人，ブルガリア人（2人）の4人，エピロス公国の統治者2人である。

6. アンドロニコス3世（1328–1341）の家族の結婚相手

アンドロニコス3世は正妻（2人）との間に男子3人女子2人，愛人との間に1人，計6人の子を得た。

㉗ イレネの結婚相手バシレイオスは，トレビゾンド帝国のコムネノス家の者であるが，それ以外のことは明らかでない。

㉘ アンドロニコス3世と最初の妻イレネとの間に男子1人が生まれたが，名前など詳細は明かでない。

㉙ ヨハネス5世の結婚相手ヘレナは，カンタクゼノス家の娘である。このカンタクゼノス家は従来ミストラ地方で勢力をもっていたが，イレネの父ヨハネスがトラキア地方を統治し，後にヨハネス5世の「皇帝の義父」として即位し共同統治した（1347–1354）。(ODB 1050)

㉚ ミカエルについてはデスポテスの称号が付されているのみで，結婚状況については不明である。

㉛ イレネの結婚相手ミカエル・アッセンについては，詳細が明らかでない。

㉜　マリアの結婚相手フランチェスコ1世は，ジェノヴァ出身のガティルシオ家の所属であり，1355年以来レスボス島の統治者になった。(ODB 824)

以上アンドロニコス3世の子供6人の結婚相手5人についてみると，外国人はイタリア人1人，帝国領内とトレビゾント帝国の者が各1人づつ，相手の事情不明1名である。

7. ヨハネス5世（1341–1391）の家族の結婚相手

ヨハネス5世は，正妻ヘレナとの間に男子4人女子1人，愛人との間に1人，計6人の子を得た。

㉝　マヌエルについては，結婚状況は明らかでない。

㉞　アンドロニコス4世の結婚相手マリアは，第2ブルガリア王国シシュマン王朝イヴァン・アレクサンドロス（1331–1371）の娘である。(ODB 1025)

㉟　マヌエル2世の結婚相手ヘレナは，セルビアの貴族であり統治者であるコンスタンティノス・ドゥラガシュの娘である。(ODB 505)

㊱　ミカエルの結婚相手は，ドブルジェア地方の統治者ドブロティザの娘であるが，名前は明らかでない。(ODB 642)

㊲　テオドロスの結婚相手バルテロメアは，アッキアジュオリ家に所属するネリオ1世の娘である。同家は12世紀以来のフィレンツェの銀行家であったが，ネリオ1世（1388–1394）時代にアテネ公となり，アッティカ地方を統治した。(ODB 9,CMH IV–1, 375)

㊳　イレネの結婚相手ハリルは，オスマン帝国第2代目の統治者オルハン（1326–1362）の息子である。(ODB 1353)

以上ヨハネス5世の子供6人の結婚相手5人についてみると，外国人はブルガリア人，セルビア人，イタリア人，トルコ人であり，それにブルガリア人と思われるドブルジェア地方の統治者の5人である。

8 アンドロニコス4世（1376–1379）の家族の結婚相手

アンドロニコス4世は正妻との間に1人の子を得た。

㊴ ヨハネス7世の結婚相手エウゲニアは，ジェノヴァ出身でレスボス島の統治者ガティルシオ家のフランチェスコ2世（1384–1403）の娘である。（ODB 824）

9. マヌエル2世（1391–1425）の家族の結婚相手

マヌエル2世は，正妻との間に男子6人，愛人との間に1人，計7人の子を得た。

㊵ イサベラについては結婚状況不明である。

㊶ ヨハネス8世は3度結婚した。最初の妻アンナはモスクワ大公バジル1世ディメトリエヴィチ（1389–1425）の娘であり，2度目の妻ソフィアはモンフェラト公の娘であり，3度目の妻マリアはトレビゾント帝国コムネノス家の娘であった。（ODB 260–261, Vasiliev, A., A, History of the Byzantine Empire, 324–1453, Madison, 1952, p. 588）

㊷ テオドロスの結婚相手クレオパ・マラテスタについては詳細が明らかでない。

㊸ アンドロニコスはテッサロニカのデスポテス（despotes）の称号をもったが，結婚状況は不明である。

㊹ コンスタンティノス12世は2度結婚した。最初の妻マデレナ・テオドラはイタリア系トッコ家のレオナルド2世の娘であり，2度目の妻カテリナはガティルシオ家のドリノ1世の娘である。（ODB 824, 2090–2091）

㊺ デメトリオスは2度結婚した。最初の妻はゾエ・パラスポンデュレであり，2度目の妻テオドラはパウロス・アッセンの娘であるが，いずれも詳細は明らかでない。

㊻　トマスの結婚相手カテルナは，ザッカリア家のコンスタンティノス2世の娘であった。ザッカリア家はジェノヴァの出身であったが，14世紀にはキオス島の統治者になっていた。(ODB 2218, Ostrogorsky, G., op. cit., 507)

以上マヌエル2世の子供7人の結婚相手9人についてみると，外国人はスラヴ人1人，イタリア人4人であり，それにトレビゾント帝国1人，さらに相手の詳細が明らかでないものが3人であった。

10. パライオロゴス王朝の皇帝家家族の結婚相手

叙上のとおりパライオロゴス王朝の皇帝家に所属する46人について，その結婚状況を見てきたが，結婚経験のあるものは36人，ないものは10人であった。そして結婚経験者のなかには生涯に2度以上結婚した者のもいるので，その結婚相手の数は正式結婚でないものを含めて48人に昇る。この結婚相手の出身地域および民族を，結婚当時のビザンティン帝国領域との関係において見ると，およそ次のとおりである。

結婚当時ビザンティン帝国領域(マケドニア及び小アジア西部)の者　…4人
元ビザンティン帝国領域（エピロス，トレビゾント）の者　……7人
外国人（ドイツ系，イタリア系　スラヴ系　ハンガリー系　ブルガリア系
　アルメニア系　トルコ系，モンゴル系）　……26人
出身地が明らかでない者（正式結婚でない者を含む）　……11人
計　48人

ここで特徴的にいえることは，外国人の数が過半数を占めるほどに多いことである。しかも年代別に見ると，ビザンティン帝国領域の者でパライオロゴス家と姻戚関係をもったのは，おそらく13世紀に属すると思われる①マリア・マルサ，②イレネ・エウロギア，③ミカエル8世それぞれのの結婚相手がス

ミュルナ地方とマケドニア地方から出たことに集中していた。なお外戚ではあるが14世紀中頃に（㉙）ヨハネス5世の義父として即位したヨハネス6世が，トラキア地方で統治にあたっていたのがこの例に挙げられる。これに対し，⑤コンスタンティノスの妻がスラヴ系であったのを初め，14世紀と15世紀にはミカエル8世の子孫には26人の外国人がパライオロゴス家と姻戚関係をもった。しかも皇帝側から見ると，③ミカエル8世と㉙ヨハネス5世を除いて8人の皇帝が全て外国人と結婚しており，その外国人は13人であった。なお元ビザンティン帝国領域の者を結婚相手に選んだのは，この王朝の期間に現れたが，皇帝家側では女性（⑬⑭⑯㉕㉗）が主であり，男性は④ヨハネス1人であった。

結　　語

このパライオロゴス王朝皇帝家の家族の結婚相手48人の出身地を，ビザンティン帝国発足以来11世紀中頃まで続いた領域，すなわちバルカンと小アジアおよびシチリアを含む東地中海諸島との関係においてみると，次のことがいえる。なお48人の内11人（③⑨⑮⑲⑳㉓㉛㊷㊺㊺㊻）についてはその，結婚相手の詳細が明らかでない。したがってここで考慮の対象になるのは，結婚相手の事情がわかる残りの37人である。

まず結婚相手が結婚当時帝国の領域内の出身思われる例として，スミュルナ（①），クゼナス（②），マケドニア（③），トラキア（㉙）がある。次いで1204年以来ビザンティン帝国より分かれたギリシア系民族国家としての，エピロス公国（⑬⑯㉕㉕）やトレビゾント帝国（⑭㉗㊶）との姻戚関係が挙げられる。また1204年以前に帝国領域内に侵入して国家を建てた異民族国家としてのブルガリア（⑫㉖㉖㉞㊱），セルビア（㉒㉟）およびアルメニア（⑰）との姻戚関係が挙げられる。なおエーゲ海諸島およびその周辺地域においては，独立国家ではないけれども支配権をもつ異民族が現れ，これらとの姻戚関係も見られたが，その例としてイタリア系（⑨㉜㊲㊴㊶㊹㊹㊻）が指摘できる。な

お元帝国領域であったとおもわれるゲオルギアの者（④）がいた。これらの例を合わせると，その数は28人になる。

他面においてパライオロゴス王朝は，本来的にビザンティン帝国領域の外側の地域の統治者との婚姻をも行なった。たとえばアジア側ではトルコ・モンゴル系（⑥⑦㊳）がある。ヨーロッパ側では帝国北部にスラヴ系（⑤㊶），ハンガリー人（⑨）があり，西部ではイタリア系（㉓㊶），ドイツ系（㉓）ノルマン系（⑩）があり，その合計は9人になる。

したがってパライオロゴス王朝では，皇帝家の家族の結婚相手で事情のわかる37人中28人は，1204年以前のビザンティン帝国領域内に居住した外国人であったことが指摘できる。確かにビザンティン帝国は11世紀中頃より，小アジアではセルジュク・トルコとオスマン・トルコにより，バルカンでは第2ブルガリア王国やセルビア王国，あるいは西方からのノルマン人の侵入により，その領域を削減された。そしてパライオロゴス王朝時代にはバルカン東部，さらに最後にはコンスタンティノポリス周辺に縮小された。しかしそれにもかかわらず，皇帝家家族の結婚相手を見ると，従来の帝国領域に支配権をもったものが半数以上挙げられた。このことは皇帝家の意識の中に領域の範囲とは別に依然として「ビザンティン世界」という観念があったのではないかと思わせる。ここにパライオロゴス朝皇帝家の姻戚関係を考察する意味が見いだされるのではなかろうか。

――文学部教授――